

卓話

平成 26 年 8 月 12 日

『信長公再発見』『信長』、「岐阜」からの発信

岐阜市まちなか案内人 代表 近藤新八様

1. 稀代の政治・戦略人

美濃は日本の中心部に位置し、672（天武1）年「壬申の乱」、1182（寿永1）年「源平墨俣川合戦」、1221（承久3）年「承久の乱木曾川合戦」と、政権の存亡に関わる大乱で重要な役割を果たした。「信長」は、歴史的事象を熟知し、「信秀」以来20年の年月をかけ、1567（永禄10）年、美濃を手中にした。金華山（稲葉山）は、濃尾平野北端美濃の中枢部に位置し、独立峰ゆえに南部に広がる濃尾平野を一望でき、尾張に變事が起こった時には直ちに軍勢を差し向けることが可能である。眼下の長良川右岸には「京」に通じる「東山道」を駆け上がれば「京」は目と鼻の先であり、関ヶ原を経由すれば、北陸へは瞬時に駆けつけられる。清洲、小牧と支配地域の拡大に合わせて城づくりを重ね、海拔329mの金華山山頂の天主に立ち、安土・「京」に想いを寄せ、天下統一の構想を練った地が「岐阜」である。



2. 先見の行政・経済人

「信長」は小牧で試行した城下町づくりを、「道三」の遺産を引継ぎ岐阜で完成させた。自然の要害に乏しい南と西には、総構え（長良川の水を引き込んだ掘割と土塁で囲む）を築いた。内側に寺と上級家臣屋敷を配置し、防御を完全なものとした。現岐阜公園一帯を城中とし、すぐ西側に上級家臣、続いて下級家臣の住居を配置し、その外側に町人住居を配置した。総構えの外側には「楽市」を形成した。都市計画の先駆者として城下町をつくり、経済振興を図ったわけである。この名残は、岐阜公園付近の道路・地名に加え、岐阜市歴史博物館の町屋模型、城下町ジオラマ等で体感することができる。北を流れる長良川の水運にも着目していた。「信長」の出生地といわれる稲沢市勝幡には日光川、清洲には五条川と、水運の持つ重要性の帰結が長良川であり、安土の琵琶湖・淀川の水運九鬼水軍の前哨でもある。

3. 鬼才の文化人

岐阜から出陣した、1570（元亀1）年「石山本願寺合戦開始」、1571（元亀2）年「延暦寺」焼討、1574（天正2）年「伊勢長島一向一揆鎮圧」等の所業を通じ、「信長」は極悪非道・暴君の代表と称されるが、「信長」は計り知れない文化人である。岐阜では20年程前から、岐阜公園一帯の遺跡発掘調査を継続している。近年、様々な遺構が発見された。丸い石を敷き詰めた洲浜を有する庭園（背景は自然の岩石）を始めとして、1569（永禄12）年「ルイスフロイス」が岐阜を訪れた際、書簡に記した、「山麓居館」の入口と思われる「巨石」や最奥部に位置する「茶室」と思われる遺構が発見されている。「山麓居館」は単一の建築物ではなく、急峻な崖を利用した積層構造の建築物ではないかと考えられている。「信長」は「茶」を好み、有力大名や家臣に茶器を下賜したのは、心管理の方策といわれているが、文化に対する造詣や思いが非常に深いといった証拠が岐阜で発見されている。実際、復元になった安土城天主の内部に立つと、「信長」の持つ「世界観」に圧倒される。

4. 信長と岐阜の全国的認知

日本人の大多数は、安土なる地名を知っている。「安土・桃山時代」という時代区分もあるから最強である。次に清洲が続く。桶狭間合戦出陣の地が清洲だからである。大河ドラマ等に取り上げられながらも、岐阜はほとんど知られていない。飛騨は知られていても、岐阜は名古屋の北にあるぐらいである。新しい発掘調査結果等にもとづいて、岐阜の認知度を少しでも高めたいと活動している。